［制作記録］

# 金工アーカイブ
## －制作手法の工夫から生み出される作品表現－

Archive of Metal Work
－The Work Expression Invented from an Ingenuity of a Technique Method－

藪　内　公　美
YABUUCHI Kumi

## １．はじめに

本稿は、平成28年度本学奨励研究費により行った研究「現代における金属工芸技法のアーカイブ化による教育的還元」において、作家による金工技法を用いた制作について、映像と共に記録したものを報告するものである。

## ２．目的

工芸技法は伝統を継承しつつも、それぞれの作家の創意工夫により独自の方法を生み出し、新しい表現へと繋がっていくものである。日々個々に更新されるそのような作品制作における作家の意思は、記録として残ることがないため、直接、教育の現場で学生に教授することはできない。しかし、一つの作品を作り上げる制作過程を通して、主題から意匠、技法、道具に至る、現代作家独自の制作理論をアーカイブ化し教育の現場で活用できれば、さらに深い制作指導が行えるものと考え、「金工アーカイブ―制作手法の工夫から生み出される作品表現―」へ取り組むことにした。

本研究は、一つの作品を作り上げるまでの制作過程を映像として記録し残すことを目標として開始した。一つの作品の完成までは、少なくとも２ヶ月は掛かることを想定し、また、様々な環境でも撮影できるよう配慮しながら進めることとなった。

まずは、私自身の作品制作過程を２ヶ月に亘り撮影した。主に、湯床吹き技法、鍛金技法、合金の溶接技法を含む作品制作である。自らの撮影ということもあり、撮影は制作の最初から最後まで全てを収めることとした。実際に本研究の難しいところは、作家本人の協力が不可欠であるということにある。それも極度の集中力を必要とする作品制作中に撮影をお願いすることは、本来かなり難しいものだといえる。しかも、この金工アーカイブで映像として記録したいものは、撮影のための制作工程ではなく、制作過程として作品が生まれる本物の現場である。そのような理由から、この研究を進めるにあたり、自分の制作過程は、まずは全ての時間を撮影してみようと取りかかった。撮影した２ヶ月分の元データ映像は、かなりの量になった。意図的な編集を加えていない映像は研究を深めるための資料として重要だと考え、そのまま繋げた長さの映像を作成した。また、長時間見ることができない場合、ダイジェストとして短時間で見せることにも活用できるよう20分程度の映像に編集を行ったものも作成した。編集を行った映像記録は、韓国誠信女子大学での講義の際にも活用することができ、他国の技法との違いなどを詳しく見せることができたと考える。

次に、本学教授の原智氏に制作過程撮影の協力をもらい、制作中の作品へ象嵌技法を施していく制作過程を２週間程度撮影した。作品への技法展開は細部に亘って作家の工夫が施されている。また、現代の工業的な道具を用いて作業上の工夫がなされていることなど、作家の道具への工夫なども知ることが



［キーワード］金属工芸　湯流し　加賀象嵌

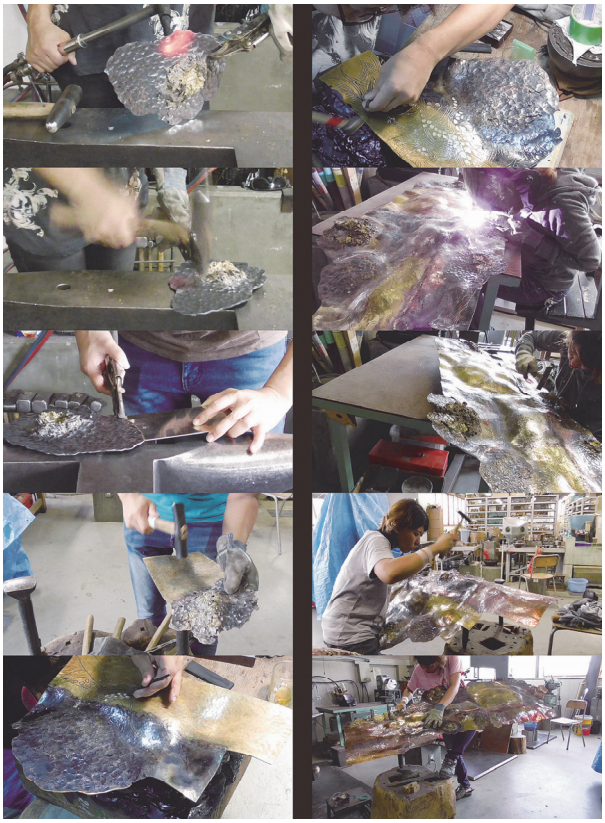
できるものとなった。

その次には、本学博士後期課程に在籍している黄照津氏の作品制作過程を、作家本人に撮影してもらうことにした。黄氏の作品制作では、黄氏が独自に表現へ取り入れた腐食と象嵌を融合させた技法がある。その独自性を金工アーカイブとして資料に加えることは、とても意義のあるものになると考える。

テストピースなどを用いた技法解説ではなく、一つの作品ができるまでになされる技法に本資料の目的がある。一つの資料として完成するまでには時間が必要だが、他にはない資料として価値のあるものにしていきたいという思いから、今後も多様な技法と工夫を見せる作品制作を取り上げていく。アーカイブ資料を充実したものにするべく、継続して研究を行っていくつもりである。本稿での報告は、そのはじめの一歩になると考えている。また現在、金工技法の文献や資料が少なく、本研究による資料は全国的に見ても価値のあるものになると考えている。

## 3．藪内公美「存在の畢竟」

2016年６月から８月にかけて制作した作品について、ビデオカメラにて映像記録を行った。この制作では、湯床吹き技法・鍛造技法・鍛金技法・合金の溶接・彫金技法などを行っている。これまでの金工技法を応用して、アルミニウムを含む銅合金の地金作り（この技法の詳細は、金沢美術工芸大学紀要第58号～61号までに掲載されているので参照されたい）から、それを打ち延ばし、さらに合金の溶接への工夫などが見られる。また、等身大に近いサイズの作品を、どのように制作していくか、鍛造→溶接→彫金→鍛金→溶接→彫金→鍛金と、制作可能な手順を考えながら作品が完成していく様子が記録されている。



## ４．原智「魚々子象嵌花器『清流』」

2016年７月に、本学教授である原智氏の自宅アトリエにて制作が行われていた作品について、象嵌技法の過程を撮影した。いつも制作が行われている現場にて、工房の工夫から道具の工夫なども見ることができる。作品は鉄地に緻密な象嵌を施していくもので、サイズもかなり大きなものとなっている。彫金技法を行うために作品内部に松ヤニが注入されていることもあり作品重量があるため、象嵌を行う時に多方向に作品を回転させられるよう特殊な工具を用いている。また、緻密に毛描かれている線の上を鏨で彫っていく様子は、見る者も緊張するほど集中力が必要であり、息をのむ制作過程を撮影することができた。

## ５．黄照津「一輪挿し『銀河』」

2017年５月に、本学博士後期課程に在籍中である黄照津氏本人によって、研究内容である象嵌を含む複合的な表現を用いた作品制作過程を撮影してもらった。さらに、作家本人と私との対談形式で、技法の細部に亘って解説を入れた映像を作成した。黄氏の制作での特徴は、伝統的な色金を用いた象嵌技法に、従来あまり組み合わされてこなかった表現技法である透かし彫り技法や腐食技法を組み合わせて行うものである。この制作記録では、一つ一つの技法の正確さも見ることができるが、それ以上に、一つの作品中に金属技法、金属表現の妙味が見られる。また、本人も研究中である“蝕金”と名付けた色金の腐食から得られる効果は、とても興味深いものがあるだろう。

## ６．授業での活用

金工を始めたばかりの学部２年生を中心に制作記録を見てもらう機会を作った。金工技法の基礎を学び始めた時期に、作家の制作記録を見ても理解できないことも多いだろうと思う反面、“技法のコツ”のような経験値でしか得られない知識を、早い段階で感じ、知ることが出来るのは、大きな意味があったように思われた。学年を指定することなく、様々な制作段階にある学年で、作家の制作記録を活用してもらうことによって、それぞれの見方、学び方ができ、研究の参考になる資料にできると感じた。

（やぶうち・くみ　工芸科／鍛金）
（2017年11月７日　受理）